〈鼎　談〉

新島八重をめぐって

井上　勝也（大学文学部教授）
福本　武久（昭和四〇年大学法学部卒業・作家）
末光　力作（大学工学部教授）

はじめに

井上　本日は「新島八重をめぐって」という題で、末光力作先生、福本武久様と私、井上勝也が鼎談をすることに相なりました。

新島襄先生の奥様であられる八重夫人が召天されたのが昭和七年でありますから、昨年が没後五〇年にあたっておりました。同志社では、創立者の新島先生についてはこの一〇〇年間、直接教えを受けた人々はもとより、きわめて多くの人々があらゆる角度から語ってまいりましたが、八重夫人については残念ながらあまり語る人がありませんでした。語る人のなかには、必ずしも八重夫人を評価しない、批判的に語る人があるということであります。本日は、生前の八重夫人をご存じの末光先生、及び現在、八重夫人の小説を書いておられる校友の福本様にご出席をいただいて、山本八重、新島先生と結婚されてからの新島八重についてお話し合いをいただき、新しい八重夫人像を描くことができればと思っております。

さて、お話の順序は、最初に会津若松時代の八重、次に明治九年新島先生と結婚され、二十三年先生が亡くなられるまでの一四年間の八重、それから昭和七年米寿を迎えられたあと亡くなられるまでの八重と、大きく三つに分けてお話を進めてまいりたいと思います。

それでは最初に、会津若松時代の八重につ

いて大変お詳しい福本さんからお話いただけませんか。

会津若松時代

福本　八重夫人の生涯を分けると、三つの時代があるというわけですが、そのなかでも、とくに会津若松時代がのちの二つの時代を決定づけたのではなかろうかと考えています。

その前に、山本八重の生まれ、及び家系に若干触れておかなければならないと思います。八重は弘化二（一八四五）年十一月三日に会津鶴ケ城下の武家屋敷内で生まれているわけですね。この弘化二年というのはどういう年かといいますと、阿片戦争が終わってから二年後で、イギリスの船が長崎に来たり、いわゆる沿岸が騒がしくなった時代といえます。

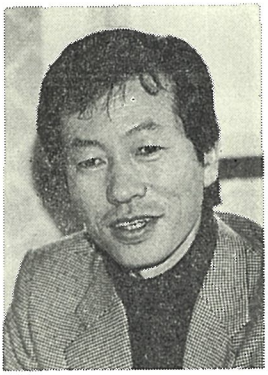
井上勝也氏

そのことから考えますと、いわば日本の夜明けというふうな時代に八重は生まれている。その意味できわめて、象徴的ではなかろうかと思うわけです。

山本家の家系については、代々兵学をもって藩に仕えた。しかも砲術師範の家柄であったわけですね。会津藩士としての山本家のポジションは、『山本覚馬伝』によりますと権八の時代に十二人扶持の上士と記録されているんですが、若干の疑問があると思います。会津の資料では百石というふうに記録されているものもあり、覚馬の時代になりますと百五十石と記載されているものもあります。山本家の屋敷の所在地、その米代四ノ丁あたりは百石から二百石ぐらいの武家屋敷がずっと並んでいるんですね。そのことから考えますと、幕末あたりはおおよそ百石或いは百五十石ぐらいの家柄であったと判断するのが正しいのではと私は考えるわけです。

次に、山本八重がどのような育ち方をしているかということですが、もの書きとしての勘を含めて言いますと、ものおじせず、活発な気質であった。育ち方も、どちらかいうと男っぽいと言えると思います。たとえば十四歳のとき、米俵――四斗で六〇キロぐらいありますが、これを四回ほど肩へ上げ下げしてみせたというエピソードもあります。それから娘になってからですが、白虎隊の隊士となって飯盛山で自刃する伊東悌次郎に銃の扱い方を教えたと八重自身が後年語っています。髪が長ければ銃を扱うのにじゃまになるといって八重の一存で勝手に悌次郎の髪を切ってしまって母のさくにしかられるというエピソードがあるんですね。そういう点からみて、どちらかといいますとわがまま、いい言葉でいえば自我の確立した女性であったと判断するわけです。

ともかく男っぽく育っている。彼女は鉄砲の扱い方とか、蘭学に非常に興味をもったのではなかろうか。とくに、人間形成の時期に兄の覚馬との触れ合いが大きかったと思われます。覚馬は嘉永六（一八五三）年に江戸勤番となってますが、この年は、ペリーが黒船をひきいてやってきた年です。覚馬は黒船をつぶさに見て江戸にいる三年の間、蘭学に親しみ、西洋の兵制と、砲術を学んで帰った。彼は会津へ帰ってから蘭学所を藩校日新館につくります。この時期において八重自身が覚


福本武久氏

馬の影響をかなり受けている。のちに彼女が西洋の合理主義的な考え方を受け入れる素地がすでに育ち始めていたのではなかろうかと思います。

山本八重自身は会津において一度結婚していますね。会津の資料によると、相手は川崎尚之助という但馬の出石藩医の子で、戊辰戦争のときはおよそ三十一歳であった。八重は戊辰戦争のときは二十三歳ですから、八歳違いです。尚之助は江戸で蘭学と舎密術――いまでいう理化学ですが、これを修めて当時江戸ではかなり高名な、若くて優秀な洋学者であった。彼は安政四（一八五七）年に山本覚馬の招きによって会津に入っている。以降山本家に寄宿するようになるわけですが、彼が蘭学所の教授となって、兄の覚馬を補佐します。のちに戊辰戦争では城内の大砲を指揮するようになる。

八重と尚之助の結婚の年月は、はっきりとはわかりません。けれども、元治元（一八六四）年が蛤御門の変ですが、翌年の元治二年と推定しています。八重の年齢でいいますと十九歳のときですね。ところが、このときになっても尚之助は、兄覚馬が招いたにもかかわらず、まだ正式な会津藩士ではなかった。そういう当時の情勢から考えますと、八重と尚之助の結婚は、かなり意図的に運ばれたように思えます。尚之助は有能な人間ですから、彼を藩にとどめておきたいということで八重との結婚が進んだように私は解釈しています。そこには覚馬の意思も介在していたのではないでしょうか。彼女にとって結婚して三年後が戊辰戦争になるんですね。

すでにその時には、鳥羽伏見の戦では、弟の三郎が淀で銃弾を浴びて、紀州から江戸へ海路を逃れ、江戸藩邸で死んでますね。その遺髪と形見の着衣が山本家へ届けられます。兄の覚馬は、蹴上から大津へ逃れる途中に薩摩藩兵に捕えられる。会津の山本家へは四条河原で処刑されたと伝えられます。

官軍の会津鶴ケ城攻めは、戊辰の年の八月二十三日から始まりますが、このとき八重は、兄嫁のうらと母のさくと、それから姪（覚馬の長女）みねとともに鶴ケ城へ入るわけですね。父の権八は六十歳になっていましたが、老人だけで組織される玄武隊の上士組に入り戦いに出ます。夫の尚之助は城内で大砲隊を指揮していました。

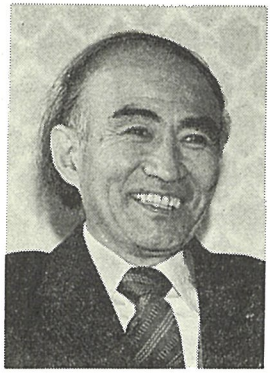
八重自身は、いろんな書物によりますと、このときは弟の形見の着衣と袴をつけて男装で入ったというふうにあります。実際には城に入るときには大沓姿（おおぐつすがた）といって、女性の戦いに出る服装で、スナイドル銃という七連発銃を持っていたというのが正しいと思います。

城内に入った婦人の役割は、兵糧炊きと傷兵の看護、弾丸づくりが主な仕事であったのですが、八重はその任務に加えて銃を持って夜襲に参加したり、城内から外に向かって銃撃するとか、女性としてもめざましい働きをしています。城へ入ってから髪を断って、弟の形見の着衣で男装して、男子にまじって銃撃に参加している。当時、女子供が戦いに出るのは城内に兵がいないことを示すものですから、むしろ会津藩では恥と考えていたので

す。ですから八重自身をそういう戦いに出させないために照姫の側近にして戦場に出ることを戒められたという逸話もあります。

籠城戦では八重自身が夫の尚之助を助けて大砲隊の指揮をとることになります。当時、小田山という高所の要塞がありますが、そこへ薩摩以下の大砲隊が砲を構えて三の丸へ集中砲撃をしかけてきます。城側は三の丸に会津の主力砲を集めます。その指揮を八重がとったのですね。その最中に藩主の松平容保から召されて大砲の弾丸の構造を説明せよと命ぜられます。彼女は敵の弾丸を御前に持っていって、それを分解して説明したということが有名な話として残っています。

鶴ケ城は九月二十二日に開城になり、そのときに八重自身城を去る決意を秘めてかんざしで、雑物庫の白壁に「あすの夜はいづくの誰かながむらむ馴れしみ空に残す月影」という歌を記して去ったというのも有名な話です。



末光力作氏

開城後は、城に残った藩士は猪苗代に謹慎させられて、女子供は自由の身となるんですね。ここで一つ注目すべきことは、八重自身が人員改めのときに「山本三郎である」と名のって、猪苗代まで男にまじって行っております。本当はそこへ行く必要はなかったのですが、女子供は自由の身ですから。なぜそのような行動をとったのか、あくまで推測にしかすぎませんが、生き残った藩士は謹慎のあと切腹というううわさが流れていたんですね。そういう状況から考えると、籠城の戦いで、いままで頼ってきたいっさいのものを失ったという虚脱状態のなかで、八重は死を決意したのではなかろうかと判断されます。なぜなら、父権八は落城の前、九月十七日に一ノ堰の戦いで討死しており、開城のときには、夫の尚之助は藩士でないということですでに城外へ去っていますから、一家離散というふうな形になっているわけですね。

開城後の八重ですが、若松から少し離れた山間部で三年過ごした。兄の覚馬が京都で無事でいることを知るのは、明治四年の夏ごろと推定されます。そうした経緯で明治四年の十一月会津を発って京都に向かいますが、しかし覚馬の妻であるうらさんは、会津を離れるのがいやだということでひとり当地に残って、事実上覚馬とは離婚になる。八重は、母のさくと、姪のみねと三人で京都へやってくる。

一方、覚馬ですが、そのころすでに京都府政のなかで重要な位置を占めています。そのときに侍女として長く仕えておりました時恵という人との間に久枝という子供が生まれてますね。これが徳富蘆花の『黒い眼と茶色の目』の主人公になります。

最後に兄の覚馬についていえば会津藩士のなかでも数少ない非戦論者でした。とくに江戸勤番のときにペリーの黒船をじかに見ていると思いますし、そういうところから、むしろ外夷の驚異から日本の国内では争うべきではないと、かなり強く力説していますね。八重自身はこの覚馬の影響を強く受けておりますから、籠城戦のなかでも、反戦の立場にありながら、藩主に仕える者としては戦わざるをえないという苦悩を背負っていたのでは

ないかと思われます。

このように、死を決意して藩主のために戦ったにもかかわらず、八重は結局父を亡くし、夫とも生き別れる。藩主のため、あるいは弟のため、兄のために戦ったにもかかわらず、最終的には故郷を去らねばならなくなり、皮肉な回り合わせですね。しかも死を決意しながら、自分が生き残ったということは、結局戦死した多くの生命のおかげである。戦死者は、生き残った八重たちの身代わりとなってすべての罪を背負って死んだ。生き残った八重はその恵みにあずかったわけです。だから救われたという意識が八重にあったと思いますね。そう考えると、無意識のうちに八重自身はそこで〝十字架の死〟を見たのではなかろうかというふうに思うわけです。

そう考えると、新島襄との後の結びつきは当然の結果である。さらにもう一つ、当時の会津人を取り巻く環境は非常に厳しかったという背景もありますね。賊軍ですから。彼らは薩長に主なポジションを奪われて政治の場には行けない。結局どこへ行ったかといいますと、将来に備えて文化的な指導権を握ろうとしたのではないでしょうか。軍人になった方もかなりおられます。文化的な指導権を握るためには、英語を学んで西洋文化を積極的に吸収しようとした。覚馬を頼って京都にやってきた八重も、そういう時代の流れと無縁ではなかったと思われますね。事実、八重自身も明治五年ごろから英語を学んで、いち早く洋装の婦人となっていますから、そこではからずも英語を媒介にして、キリスト教に接近していくというふうな流れがあったのではなかろうかと思います。

井上　ありがとうございました。末光先生何か会津時代の八重について補足していただくことがありましたら……。

末光　いま言われたことで尽きているのじゃないですか。兄の覚馬の影響をかなり受けた方だと思います。女性でありながらスナイドル銃を持って籠城にはせ参じたという話がありましたが、たしか覚馬は大砲を撃ち過ぎたため、硝煙で眼が悪くなったと覚えています。八重さんはそれくらい大砲を撃ったり銃を撃った人を兄に持ったのですね。スナイドル銃といった当時としては最新式の銃を持って籠城するというふうなことは普通の女性では考えられないことですが、やはりそれは兄覚馬の影響だと思います。

井上　いまお話しになったようなことで会津時代は尽きると思いますが、彼女が鶴ケ城に籠城するのが二十七歳ということで、性格形成はもう会津時代で終わっていると言っても言いすぎではないと思いますが、彼女のいわゆる男勝りというか、女丈夫的な面が、会津という風土から、あるいは砲術師範の山本家という家柄か、両親の育て方からくるものなのか。とくに私が興味をもつのは、女性でありながら砲術をマスターすることが当時許されたのかということです。

福本　会津というのは武術を重んじる風潮が強かったですから、とくに砲術師範の家ということであれば、許されたと思うのですね。籠城戦のなかでも薙刀で戦う女性もおりますし、武術に対しては女性も修練を積んでいたかと考えられますね。

井上　日本的な薙刀ならわかるんです。しかし八重さんが近代兵器としての大砲であるとか七連発銃であるとか、あるいは大砲の弾を分解して藩主に説明をしうるだけの知識をもっていたという点に、私は驚くのです。

籠城時の八重

軍装の八重（明治三十四年撮影）

末光　そうですね。大砲に関しそれだけの知識を持っていた人は当時男性の中にも会津にはいなかったのではないでしょうか。

キリスト教との出会い

井上　先に進ませていただきたいと思いますが、福本さんは小説を書いておられるということで非常に詳しくお調べですので、会津時代の山本八重についてはこのあたりにいたしまして、いよいよ京都に出てまいりますのが明治四年の十一月でございますか。それから明治九年の一月に新島襄と結婚いたしますまでの数年間、これはやはり八重を理解するうえでは重要な時期だろうと思いますので、このあたりについて、末光先生から口火を切っていただけますか。

末光　私が今日この鼎談にお招きを受けたのは、昨今、生前の新島八重を知っている人はそう多くないし、殊に同志社内では私が数少ない一人だという希少価値からだと思います。私が学生に「私は新島夫人を知っている。」というと学生はびっくりします。学生にとって新島夫人といえば遠い歴史上の人物ですものね。しかし私はごく晩年の八重夫人を知っているだけです。実は私のうちと新島家とは交際がございまして、子供の私は八重さんを〝新島のおばあちゃん〟と呼んで接していたのですが、その話はあとでさせて頂きます。

井上　明治四年から九年までの数年間の山本八重について、ひとつ押さえておく必要があるのはその間に彼女がキリスト教に接近してまいりますし、京都という土地で女紅場の教師になりますね。

末光　明治四年兄の覚馬を頼って会津から京都へやってくるわけですね。覚馬という人は京都の近代化のために素晴しい仕事をつぎつぎとやっていますね。今言われた日本で最初の女学校、女紅場を作ったり、今でいう工業化学研究所である舎密局を作ったり、いまの京大病院のところに牧場を拓いたりしているのですが、八重さんは女紅場の先生になっていますね。明治八年、新島襄がキリスト教主義の学校を建てるため京都にやって来て、覚馬と会い、やがて二人は意気相通ずるようになり、学校建設のため覚馬は新島を助けることになるわけです。八重さんは明治九年の一月に新島襄から洗礼を受けていますね。こ

れは京都に於ける最初の洗礼式であったようですが、これは八重さんを語るとき非常に大きな出来ごとだと思います。明治政府は江戸幕府の切支丹邪宗門禁制を踏襲して最初はキリスト教を禁じるのですが、外国の圧力によってその禁制を解くのが明治六年です。それから僅か三年しかたっていない明治九年、世間にキリスト教を白眼視する風潮が根強く残っていたときに、仏教の大本山が並びたつキリスト教にとって抵抗の強い京都という土地で真先に洗礼を受けるということは、余程の勇気がいることだったと思います。個性的な正しいと思ったことは断行する八重さんの性格を示す興味深い出来ごとだと思います。

井上　『山本覚馬伝』の年譜を見ておりますと、覚馬は慶応四年、「管見」という建白書を執筆して薩摩藩主に差し出していますね。この「管見」は、非常に近代的な内容の盛り込まれたものだと思いますが、例えばこういうのがあります。「学校」という項に「我国ヲシテ外国ト并立文明ノ政事ニ至ラシムルハ方今ノ急務ナレバ、先ヅ人材ヲ教育スベシ」とあり、「女学」の項には「国家ヲ治ムルハ人材ニヨルモノナレバ是ヲ育スルハ緊要ナリ。日本支那ハ婦人ニ学問ヲ教ヘズ、自今以後男子ト同ジク学バスベシ」と書かれています。こういう近代的な知識や考え方を山本覚馬はどこから仕入れたのか、武田斐三郎、佐久間象山、勝海舟といった洋学者から学んだのか興味があります。「管見」を読んでおりますと、彼がその後京都府の顧問や府会議長になり、新島のよき理解者・協力者になる人物だということがわかりますが、こういう新しい欧米の知識や考え方を八重は兄から、会津時代も、あるいは京都時代も、いろんな形で学ぶことができたのではないでしょうか。

それから『山本覚馬伝』の年譜によりますと、明治五年に早くも覚馬はキリスト教信徒であるという報告を、当時の諜者いわゆるスパイから太政官に報告されていますね。明治八年にゴードンに『天道溯源』をもらって、槇村正直と三人でキリスト教について討論したということが出ておりますが、この山本覚馬という人は、明治五年以前に、あるいは幕末にキリスト教に関する書物を繙く機会があったのではないでしょうか。新島先生が明治八年七月七日付でアメリカの友人に宛てた手紙に、山本覚馬のことが詳しく書かれているのですが、こんな文章があります。「……彼（覚馬）がゴードン博士からこの作品（『天道溯源』）を受けとってしばらくして、私が彼を訪問しましたとき、彼はあれは優れた書物だと私にいいました。『それは私に大層役に立ちました』と彼はいいました。『それはキリスト教に関する私の疑念を払拭してくれ、私が長年心に抱いていた困難な問題を解決してくれました。私は若い頃国家に何らかの奉仕をしなければならないと考えておりまして、兵学に没頭いたしました。しかし後になってそれが国家に対して本当の奉仕をするには不十分であることが判りました。……私は自分のむつかしい問題を解く方法を発見して、喜んでいます。キリスト教だけが人間の心のバネに触れ、それを活気づけることができます。夜が明けて、私は全く知りませんでしたが、無意識に探し求めていた道を今や私は見ることができます』。……」。山本覚馬は新島先生に出会う前に、既にキリスト教の本質をつかんでいた人だと思います。こういう兄の影響もあって、八重さんは明治八年、ゴードンの家や三条大橋西詰の旅館目貫屋に泊まっていた新島先生のもとに聖書を習いに行くといっ

たことが資料に上ってくるのですね。

この頃の八重さんについて福本さん如何ですか。

福本　いま先生がおっしゃいますように、「管見」は近代日本の大構想を述べた報告書です。これが京都の具体的な行政に生かされ、そのなかで山本覚馬は重要な役割を果たしていくのですが、京都はその当時、日本でいちばん近代的な都市になっていきますね。そのなかで八重さん自身もさらに大きくキリスト教とか、西洋的な文化に目を開かれていく時代だと思いますし、新島先生との出会いは明治八年になると思いますが、それまでにかなり、そういう下地ができていった時代だと思います。

それと明治五年に小野組転籍事件というのがありますが、槇村知事――当時は大参事だった――が中央政府に捕われて東京に送られます。それを救うために山本覚馬が東京へ行くのですが、それに八重が付き添っていくわけですね。その間中央政府を駆けずり回って嘆願をするのですが、そのとき八重自身も明治の東京の文化に目を開かれたと思いますし、その間の三カ月というのは覚馬との対話が深まった時期だと思います。

それと、山本覚馬のキリスト教との関わりですが、漢訳の『聖書』が日本へ入ってきたのはかなり古くて、覚馬は二十五、六歳のときに江戸へ出ておりますが、そのときにはすでに入っておりましたね。ですから覚馬自身もおそらくその時に触れているかと思います。ただ私がわからないのは、そういうキリスト教的な考えが覚馬に育っているにもかかわらず、彼が洗礼を受けるのはずっとのちですね。明治十八年で、このあたりはどうしてかなあという疑問が私にはあるんですね。

新島先生との出会い

井上　それでは話を少し進めまして、新島先生との出会いに移りたいと思いますが、明治八年の六月ごろから新島は山本家に寄宿をするようになりますね。その年の三月に新島は大阪からお父さんの民治あてに手紙を送っておりまして、自分の結婚のことについて、次のように彼は書いております。新島の結婚観・女性観を読み取ることができると思うのですが、途中から読みますと、「当分妻の儀ハ延引ニ可致、乍然此分ニ而参候へハ日本国中をさがしても小子の意ニ応ずる者ハ有まじと心配いたし居候。小子ハ決し而顔面の好美を不好、唯心の好き者ニし而学問のある者を望み申候。日本の婦人の如くなき女子と生涯共ニする事ハ一切好ましく不存候」というように書いております。

この最後の部分の「日本の婦人の如くなき女子」というところの「なき」というのは、これは否定になるわけでありますから、のちほどまた一つ引用いたします文章から推察しても、新島先生は当時の日本女性の夫に仕え従うというタイプの女性は望んでおられなかった。だからこの「なき」という言葉が問題になると思うのですが、先生はどういう一つの女性観をもっておられました。

もう一つ、私は非常におもしろいと思いましたのは、これは『新島八重子回想録』に出ているものですが、新島先生の理想的ワイフ像が出ておりまして、槇村正直が新島襄に向かって、ある日、こういうことを言っております。「『あなたは妻君を、日本人から迎えるのか、外国人から迎えるのか』と尋ねられました。裏は『外国人は生活の程度が違うから、やはり日本婦人をめとりたいと思います。し

かし亭主が、東を向けと命令すれば、三年でも東を向いている東洋風の婦人はご免です』と、そういうように答えたということです。それならちょうど適当な婦人がいるということで、山本覚馬の妹の八重さんが具体的にあがってきたのです。

こういうことで、いよいよ明治八年の十月に新島先生と八重さんは婚約をすることになります。新島が三十二歳、八重さんが三十歳ですね。それでその翌年の明治九年一月二日に八重さんはディヴィス宅で洗礼を受け、翌日の三日にお二人は結婚式を挙げました。ここから新島夫人になるのでありまして、十四年間の新島との結婚生活が始まります。

新島先生を理解するうえで、やはり内助の功を発揮された八重さんの存在は非常に大きかったのではないでしょうか。ところが、残念ながら最初にも申しましたように、八重については当時、けっしてよく言う人がいない。これはなぜなのか。そのへんからまた話を進めたいと思うのですが、福本さんいかがでしょうか。

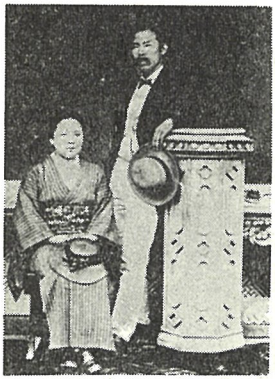
福本　いま先生がおっしゃったように、従来の日本婦人的な人を新島襄は奥さんとして望まなかったのですが、これはなぜかということですね。新島は日本へ帰ってきてキリスト教をひろめ、あるいはキリスト教の学校をつくるにあたって、やはり西洋人的な生活を身をもって示さなくてはならなかったと思うのですね。たとえば、当時の日本は儒教的な精神の根強い国ですから、男と女はいっしょに並んで歩くこともできなかった時代だと思うんですね。ところが新島の場合は人力車に二人いっしょに乗っていくとか、そういうことを身をもって実践しなければならなかった。そういう新しい生活についてきてくれるような人を奥さんとして望んでおられた。しかもそれをこだわりなくやっていったのが八重夫人だと思うんです。

よく言われないというのは、とくに熊本から来た熊本バンドの、徳富蘇峰をはじめとする連中なんですが、彼らはたしかに熊本でジェーンズに英語を学んで京都にやってきたのですけれども、従来の儒教的な精神から抜けていないで、それを土台にした美学のうえから反発をしたのではないか。しかも襄先生には文句を言えないものですから、むしろ奥さんにその憤懣をぶつける。たとえば新島が自分の手を笞で打つという有名なエピソードがありますが、実際に自分の身になって考えてみますと、そういうことを目の前でやられたらたまらんと思うのですね。そういう意味で襄に対するコンプレックスが連中にはあっただろうと思いますし、そういう襄に対する不満を全部奥さんにぶっつけて、その結果、奥さん自体があまりよく言われないとそういうふうなことにつながったのではなかろうかと思うのですが。

末光　いま新島先生と八重さんとの結婚の話がありましたが、面白いエピソードがあるんですね。明治九年お二人は宣教師のディヴィス邸で彼の司式のもとに結婚式を挙げてそこから新島邸に相乗りの人力車に乗って帰ったのですが、その費用が一〇銭です。新島ご夫妻の結婚式の費用はしめて一〇銭であがったというわけです。日頃は車代が五銭だったそうですが、今日はおめでたい日だからというので奮発して倍の一〇銭を車夫に払ったというのです。この話から見ても新島先生夫妻の考え方が非常に合理的で、浪費はできるだけ省くといった生活態度が見られると思います。それから当時は夫婦二人で外出すること

となどまず無かった時代ですが、堂々と夫婦で人力車に相乗りして仲の良いところを世間に見せておられる。これなども非常に面白いですね。

それから熊本バンドの話も出ましたが、だいたい熊本というところは神風連の乱が起こるような非常に保守色が強いところです。そこで古いしきたりや道徳に培われ育ってきた徳富蘇峰などの熊本バンドの青年が洋行帰りの先生を見、新しいことをどしどし取り入れる夫人に接したら反発するのが当然だと私は思います。蘆花の『黒い眼と茶色の目』の中にもそのへんのことがかなり詳しく出ています。「髪を只中から二つに分けて西洋婦人の様に大きな飾付の夏帽をかぶり、和服に靴をはいて、帯の上に時計の鎖を見せた折衷姿を



新島襄夫妻

創業時代の協志社（同志社）生徒は鵺（ヌエ）、鵺（ヌエ）と呼んでいた。偉い人の妻に評判の好いのは滅多にない。飯島（新島）夫人の評判は学生間には甚だよくなかった。」とあります。鵺（ヌエ）というのは源三位頼政が退治したという化け物のことですが、面白いですね。

福本　頭と足は西洋で、中身は鵺（ヌエ）と、〝八重〟ということから〝鵺（ヌエ）〟にもじったのだと思いますけどね（笑）。

末光　こういった夫人評も当時の風俗習慣から見れば止むをえなかったと思います。

福本　目の前でそういうことを言われても平然としていられたということは、やはりすごいことだと思いますね、当時の女性として。

井上　いまおっしゃっていることは、『蘇峰自伝』でこういうように書かれています。「新島先生夫人の風采が日本ともつかず、西洋ともつかず、いわゆる鵺（ヌエ）のごとき形をなしており、かつわれわれが敬愛している先生に対して、われわれの眼前においてあまりになれなれしきことをして、これもしゃくにさわった」。ここらへんが後ほどの新島八重批判の一つのルーツではないでしょうか。これがずっと語り継がれるとともに広がっていったのではないかと思うのですが。

末光　夫人はときには洋服を着るでしょう。洋装して帽子なんかかぶって、それからハイヒールを履いておられるのですね。これに関して面白い話があります。ある日、八重夫人が外出しようと思って靴箱から英国製のハイカラなハイヒールを出したら、いつの間にか踵が低くなっている。びっくりして夫人が先生に告げると先生は「あなたが倒れてはいけないから裏が切りました。実は結婚前からそれが心配でならなかったのです。」と答えられたそうです。

それから八重夫人は自転車にも乗っておられますね。恐らく日本で女性が自転車に乗った最初ではないでしょうか。昔の自転車は今と違ってタイヤじゃなくて鉄の輪の自転車ですから、乗ればガラガラと音がする。それで京都の市中を乗り回すのですから夫人の存在が一遍でわかってしまいますよ。だから前にも言ったように熊本から来た青年たちは夫人の行動を奇異に感じると思います。そんなところから彼等の反発を買ったのではないでしょうか。

従軍看護婦時代の八重（前列中央）

井上　日本の近代化は、女性の近代化といいましょうか、女性の自立が重要であるということは黒田清隆なども考えて、明治四年の岩倉ミッションと共に女性の留学生をアメリカに送り込んだのですが、アメリカに九年近くも生活しておられた新島先生にとっては、当時の日本的タイプの女性は耐えがたい存在であって、やはり自立心のある八重さんのような方を伴侶にしたいと思っておられた。ちょうどそういう女性が眼前に現れて結婚をされたのですが、先生にとっては夫と対等平等の言動をする八重さんというのは周囲の批判を意に介せず、よき理解者であり、よき妻であったのじゃないでしょうか。

末光　私もそう思いますね。それから新島先生の「笞打ち事件」は有名ですが、あの事件の直後、先生は夫人と相乗りの人力車に乗られた。そのとき夫人の大きな体が先生の手に触れたのです。先生は思わず〝痛い〟と叫ばれた。夫人が理由を聞くと先生は「実はお前には言わないつもりだったが、今日学校でこんな事があった。」と笞打ち事件について夫人に話をされたというのです。この話は先生が笞で手を打つ芝居をされたのではなく、本当に力いっぱい笞で手を打たれたことを証明しています。私は八重夫人は新島先生の良き理解者だったと思います。問題が山積して苦闘している先生の良き話し相手であり、良き慰め手だったのではないでしょうか。

井上　やはり新島先生の平民主義というか、デモクラシーからいえば、先生にふさわしい妻だったと思いますよ。自分の意見を率直に新島先生に述べられているところが『新島八重子回想録』に出てまして、これはおもしろいなと思うのですが、八重さんは次のように申しております。「明治九年の一月三日に、私は新島へ参りました。二年程後に、親類に一寸むつかしい事ができて、襄はそれを許そうとしました――」これは『黒い眼と茶色の目』に出てまいりますね――「けれども私は『臭いものに蓋をしてはならぬ。すべてを明らかにしなければならない』と主張して譲りませんでしたので、襄は、『お前の強情は、かねがねお兄さんや槇村さんから聞いていたがこんなにひどいとは思わなかった。私はとんだしもうたことをした』と言って大変笑ったことがありました。」こういう女性あるいは妻は当時考えられなかったでしょうね。しかし、新島先生にとってはそういうように率直に言ってくれる妻が必要だったのじゃないか。あるいはそれを望んでおられたと私は思うんです。ニューイングランドの女性がやはりそうでしたからね。非常に自立心に富んだ、そういうタイプの女性を見てこられ、それを頭のなかに描いておられたようですから。

末光　いま井上先生が言われたのは、たしか山本覚馬の後妻の時恵さんが山本家の養子

にと考えられていた会津出の青年と関係して不義の子をはらむ事件のことだと思います。会津時代の八重を述べるときに言い忘れましたが、会津藩少年集団「什」の申し合わせの条文というのが七項目ありますね。その最後に「ならぬことはならぬのです。」というのがあります。あれは私、非常に簡潔で面白いと思いました。非常に正義感が強いといいますか、そういうものが八重さんの中にあって、「不倫は絶対に許されんのだ。」と言い張ったのですね。それで時恵さんは即刻離縁、追放です。ならぬことはならぬというようなところは会津かたぎとでもいいますか、そんな面を八重さんは持っていたと思います。

福本　それは覚馬も同じですね。槇村正直をかつて助けたのですが、のちに知事になってから地租税でもめたときに槇村をむしろ辞めさす方向に動くのですね。槇村が府議会の決定を無視したときに、いままでいっしょに京都の産業を支えてきたわけですが、そういうことがあると、やはり槇村にも辞めろというような形で動くわけですね。

井上　少し先を急ぎたいと思いますが、新島先生は日本に帰られまして亡くなられますまではほんとに忙しい方で、東奔西走、キリスト教の伝道のために、あるいは大学設立のために家をあけられる日が多かったのですが、旅先からしばしば八重さんに手紙を書いておられます。その手紙を読みますと、非常に妻をかばっておられるな、妻のことを思っておられるなと思いますね。たとえば、おまえをひとりにして寂しい思いをさせているのは申しわけないと書いてられるし、一方、自分の親が高齢であるので、温かくし、こなれのいいものをつくってやってくれとしばしば書いておられるし、もう一つ、学生さんを家に呼んでご馳走してやってほしいということがよく出てまいりますね。また常に同志社を思い、学生一人一人を思うことも。これは新島先生の教育者としての偉い面だと思いますが、また八重さんは学生の面倒をよくみ、新島先生の衣服、肌着なども困っている学生にどんどんあげてられますね。ですから新島八重という人は、そういう面で陰に陽に同志社の学生を大切にし、同志社の教育のために間接的に内助の功を発揮した方だと私は見るんですが。

それから新島先生は、明治十七、八年ごろからしばしば病気になられます。とくに心臓病だということがはっきりしてまいりますのは明治二十一年ごろからですが、自分が亡くなってからの妻のことを非常に心配をして、十津川の山林王である土倉庄三郎にあてて次のような手紙を書いておられます。私は非常に感銘を受けたんですが、こういう文章です。二十一年五月の日付で、早晩小生は心臓病のために倒れるべき覚悟をせねばならぬといって、

「然し、右の覚悟なし居り候へ共、心に残す所は妻の一事なり。小生なき後に、当分支ふべき事は出来申すべく候も、往々は覚束なく候間、同人貧困の時の用意を為し置き候て暮年に及び乞食とはなし度く存ぜず候。右に付き、貴殿に御願ひ申上げ度き一事これ有り候。兼て御話これ有り候マッチとなる樹木植付の事なり。小生帰京の上、貴殿に金三百円御預け申すべく候間、小生をマッチ樹木植付のコンパネーとなし下され、二十年の後貴殿と同じく利益を分つ丈けの御約束を願ひ置き、家妻万一の用に供し置き度く候。万一利益なき秋（とき）はそれ迄の事にて、貴殿に御心配は毛頭も懸け申さず候。過日病変のありしよ

り、此の一点に心配いたし居り申し、今少々快よき方に向候間、鉄面皮ながらも、此の一事丈けは貴殿に御依頼申上げ置き度く候」と、自分の死後の妻の生活のことを、非常に心配されていることがよくあらわれていると思うのです。

末光　明治十七年から十八年にかけて新島先生はヨーロッパ、アメリカに行っておられます。その時、スイス・アルプスに登山されて、心臓病の発作が起こって九死に一生を得られたことがありましたね。帰国されて先生はそのことを学校で話されているのですが、そのことが『黒い眼と茶色の目』に載っています。それを見ると、「自分はそのとき非常に苦しんだ。諸君のことを思い妻のことを思い。」――ワイフのことを思いと仮名がふってありますが――とあります。先生の話を聞いてそこにいた夫人が両手で顔を覆って泣き出した。敬二（蘆花）はそれを見て不快感を持ったとあります。こんなことを大衆の前で平気で言う先生も先生だし、それを聞いて涙を流す夫人も夫人だ。何とはしたないことだと蘆花は思ったのですね。

先生召天後の八重夫人

井上　いよいよ新島先生は明治二十三年の一月に大磯で亡くなりますが、その明治二十三年から昭和七年まで四十数年間八重さんはおひとりの生活が続くのですけれども、そちらに話を移してまいりたいと思います。末光先生、幾つくらいのときに八重さんにお会いになりましたか。

末光　いや、そんな個人的な話をしていいんでしょうか。実は私のうちはさっき言いましたように八重夫人と交わりがあったのです。父は北海道大学予科で教授をしていたのですが、海老名弾正総長に招かれて大正九年同志社大学予科教授となったのです。父は新島襄先生に心から傾倒していたので、聖書を研究することによってより一層新島精神を学ぼうという目的で、父と同時に海老名先生に招かれた竹崎八十雄先生と一緒に学生の聖書研究会を作ったのです。そして研究会の名前も新島先生の名前がヨセフ新島ですから「襄」という字を書いて襄（ヨセフ）会としたのです。この会は週に一回昔あった東門の一室で持たれたのですが、大正九年から戦争がはじまるまで二〇年にわたって続き、父がそのお世話をしたのです。この会にときどき新島夫人に来て頂いてお話を伺ったりしていたようです。父の話によりますと同志社人として新島夫人と何とか温かい交わりを持ち老後をお慰めしたいという気持が父には働いていたようです。そんなことで私のうちと八重夫人との交わりが生じて、私など小さい時から夫人に非常に可愛がられました。私は夫人からいろいろなものをもらうのですね。大きなゴムのボールをもらいましたよ。私は小学校へあがる前の元気のよい子供でしたが、ぽんぽん蹴りますとそのボールが割れるのです。するとにこにこ笑って「また割れましたか。」と言って新しいボールを買ってくれるのです。私はこの鼎談のために蘆花の『黒い眼と茶色の目』をもう一度読み直したのですが、その中で久栄さんが叔母の八重さんからゴムのボールをもらうくだりがあるのを見つけました。八重さんは姪の久栄さんと同じように私にもゴムのボールをくれたのだなあと大変興味深かったです。

夫人が亡くなったのは昭和七年ですが、そのとき私は新島邸に連れて行かれてお別れを

した経験があります。そんなことで少しばかり晩年の八重夫人を知っているわけです。

井上　先生はそういう貴重な存在であられるのですが、人間新島八重といいましょうか、あるいは女性としての新島八重、だいぶ年齢もちがってはおられたでしょうけれども、そういう面についてお感じになったことをもう少しお話しいただけませんか。

山本覚馬を囲んで

末光　いま申しましたように私は小学校にあがる前から小学校低学年の子供でしたから、そこまでわかりませんが、非常に温かい感じのする方で〝新島のおばあちゃん〟という感じで接しておりました。さっきも話がありましたように余りよくない評判もありますが、私は静かな晩年を送られたように聞いています。茶道・華道に心得があり、建仁寺の黙雷和尚とは茶友で和尚から袈裟をもらったのですが、世間では刀自はキリスト教を去って仏教徒になったようにいったのです。これなどまったくの誤解で、私の父などこのことに関して非常に同情的でした。偉い人の奥さんは世間からいろいろ言われて大変ですね。

井上　当時の学生が、新島先生が亡くなってからのちのことですが、八重夫人に会いに、あるいは話を聞きに案外行ってますね。

末光　行っていますね。先生の家でご馳走になったとか、正月のかるた会が楽しみだったとか、夫人はとてもかるたが上手だったとか当時の学生が書いています。昨年は山本覚馬没後九〇年ですが、没後四〇年の記念の会が新島邸であって同志社中学の生徒が多数出席しております。そういう記念の日に新島邸へ行って夫人を慰めているのですが、当時中学長だった父がその橋渡しをやったようです。

井上　新島先生が亡くなられてからの八重夫人について、福本さんいかがでしょうか。

福本　いろいろ私も調べてみたんですけれども、あまりはっきりとはつかむことができないのですが、晩年の写真なんかを見てますと、ものすごくやさしそうな顔をされてますね。もうその時代になってきますと同志社も学校としてでき上がっている時代だと思いますし、そのなかで八重さん自体は従軍看護婦をなさるのですが、時代的にいいますと、いままでの自分を静かに見詰められる時代に入ったのじゃなかろうかと思うんです。たとえばある学生に、「人間は傲慢であってはいけません。しかも知的傲慢というのはいちばんいけない」というふうな趣旨のことをおっしゃっていることから考えますと、かなり自分自身というものを深く見詰められた時代じゃなかろうかというふうに思います。

新島八重夫人

井上　八重夫人は新島先生が亡くなられた翌年の明治二十四年に日本赤十字社にお入りになり、日清戦争、日露戦争では従軍看護婦としてご活躍ですね。それから晩年は茶道をなさったり和歌をつくったりという、それを悠々自適というのか、なにか一面寂しさをわれわれは感ずるのですが、案外ご本人は毅然として、ひとりでの生活をエンジョイなさっていたんじゃないでしょうか。家族主義的な発想からすれば、当時ひとりであの大きな屋敷に住んでおられたのですから寂しいのではないかと思うでしょうね。現在核家族で、とくにお年寄りがひとりになるということは普通になってまいりましたけれども……。

新島八重という人を、われわれが現代に視点を置いて評価する場合には、これは明治時代の徳富蘇峰や蘆花の理解とは大きな違いがあると言えるのではないでしょうか。アメリカで長年生活をされた新島襄先生にとっては、これは時代が少し早やすぎたがゆえに批判を受ける面はあったけれども、先生にとってむしろふさわしい妻であったのではないか。当時批判される部分も、非常にりっぱだという面での評価が現在は可能になるのじゃないでしょうか。

福本　むしろ、女性史のうえでもう一度再検討されるべきだと思いますね。

井上　日本にも八重さんのような女性が幕末明治にいたのだということですね。日本の近代的な女性の先駆者だとさえ思います。新島襄というよき夫をもって、それが生かされたという部分があるでしょうね。

末光　昔から偉い人の奥さんというのは総じて評判が悪いものですね。ソクラテスの妻のクサンティッペはその最たるものですが。世間は「新島夫人」という肩書を通して八重さんを見ますから、八重さんを見る場合その点かなり割引きをしないといけないと思います。

井上　最後になにかひと言……。

福本　最後の三つ目の時代ですが、同志社のできるまで、及び新島先生の生きておられる時代は同志社草創の時代ですから、八重さんはいろんな意味で活躍されたし、新島襄を助けていろんなことをやられたわけですが、死なれてしばらくしてからは、もうそういう時代じゃなくて、同志社は組織的にでき上がっている時代ですから、出番がだんだん少なくなってきたのも当然で、ご自身もおそらく自覚されていたのじゃなかろうかと思うのです。さっき井上先生が悠々自適というふうなこともおっしゃいましたが、ご自身もどこかにそういうふうな生活を楽しんでおられたのじゃなかろうかと思いますね。

さらに、新島八重というのは近代的な女性の最初の人であるというふうな趣旨のことをおっしゃいましたが、そういう意味から言えば、いままでいろんな女性史が書かれていますけれども、そのなかで隠れた存在になっていると思うんです。もう一度、それが掘り起こされてしっかりと位置づけられる必要があるという意が強いですね。

末光　新島先生が亡くなってからの夫人の長い人生で、夫人は控えめに、表に出ないよ

うに心がけて生活されたのではないでしょうか。だから発言なんか余り残っていないように思うのです。丁度、十五代将軍の徳川慶喜は幕末では非常に活躍するけれども、明治になってからは活躍する能力は充分持ちながら静かに表に出ないで生活されたように、新島夫人も自分が表に出ない方が良いという意識があったのではないでしょうか。

井上　女子部との関係は、少しはあったようですね。

末光　私、ちょっと聞いたのですが、女子部のために長年尽くされたデントン先生とは取りたてて言う交わりがないのですね。二人とも勝ち気な女傑ですから。その点やはり面白いと思っています。

井上　「同志社時報」のバックナンバーを調べていただきますと、新島八重についてはまったく取り上げていないんです。今回初めて鼎談という形で取り上げたわけですが、先ほどからもお話に出ておりますように、新島八重という人は現代からみれば新島襄にふさわしい妻であったし、近代的な考え方をしっかりともっておられた方だなと思いまして、きょうの鼎談が新島八重復権の一つの手がかりにでもなればその意義もあったのではないかと思っております。

長時間ありがとうございました。

（一九八三年一月八日収録、於同志社有終館担当理事室）

同志社談叢　第二号

論文

新島襄の英文の自叙伝……北垣宗治

新島襄と沢山保羅
—経歴の対比と二人の交流—
……佐野安仁

同志社の近代建築（上）
—遺構と資料—……前　久夫

資料

今泉真幸日記抄……高橋　虔

同志社理事会決議録
—自明治三十二年七月・至明治三十七年二月—

新島襄に関する文献ノート
—著者・筆者別—……河野仁昭

○

同志社談叢　第三号

論文

悲劇の日本銀行総裁・深井英五（上）
—金融政策の激動期を生きた同志社人—……杉江雅彦

ある明治の軌跡
—市原盛宏小伝—……相川尚武

わが国初期看護教育における京都看病婦学校の位置づけについて
……亀山美知子

同志社の近代建築（中）
—遺構と資料—……前　久夫

資料

理事会決議録
—自・明治三十七年三月二十八日至・明治四十五年五月二十一日—

日本基督教伝道会社第九年会記事

新島襄に関する文献ノート
—著者・筆者別—……河野仁昭

発行・同志社社史史料編集所
取扱い・同志社収益事業課
頒価　第二号　九〇〇円
第三号　一、〇〇〇円